

「父なる神の大きな愛」

ルカ15：11－24

堀田修一 25・6・29

本日の聖書箇所は、聖書の中でもっとも有名な、「放蕩息子」の物語です。この父は、私たち人間を大きな愛で愛される神を示し、放蕩息子は、神の愛を受けながらも神は窮屈な方だと誤解し、神から自由に生きようとする罪人である私たち人間の姿を示しています。

I 「ある人に二人の息子がいた。弟のほうが父に『お父さん、財産のうち私がいただく分を下さい』と言った。それで、父は財産を二人に分けてやった。それから何日もしないうちに、弟息子は、すべてのものをまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して、財産を湯水のように使ってしまった」：11－13。

1. 当時、イスラエルの社会では、父親が亡くなった時、兄弟が二人の場合は、兄は弟の二倍の分け前をもらうことになっており、弟の分け前は全財産の三分の一でした（申命記21：17）。しかし、父が生きている間に財産の分け前をもらう場合は、九分の二しかもらえなかったようです。とにかく弟は、それを手に入れたら、数日後何もかもまとめて遠い国に旅立ち、そこで放蕩（遊び呆ける好き勝手な無駄使い）の生活を送り、財産を湯水のように使ってしまった。その後その国に飢饉があり、彼は食べるにも困り、とうとう豚の世話をするはめになった（種蒔き刈り取りの法則。父は息子が自分の決断とその結果を味わうことを愛の故に通らせた。神ご自身も同じです「人は種を蒔けば、刈り取りもすることになります」ガラテヤ6：7）。

2. 彼は我に返って言った。『父のところには、パンのあり余っている雇人が、何と大勢いることか。それなのに、私はここで飢え死にしようとしている。立って、父のところに行こう。そしてこう言おう。「お父さん。私は天（神）に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇人の一人にして下さい』』。

3. 私たちの人生にもいくつかの転機、挫折、自分が蒔いた種の刈り取りの苦しみがありません。ある転機には、苦痛を味わいます。私たち人間は、順調な時は、すぐに心が高ぶり、自分の無力さ、欠け、欠点、醜さを認めることをせず、「自分の力でやっていける。神なんかいない」と思い上がります。何かが出来た時、それをする命、能力を神が下さったことに気付いていないのです。私自身がそうでした。ここに登場する弟のように、自分勝手に生きる事が、真の自由な生き方だと思い込むのです。それは、自分を神（人生の支配者）とし、真の神を神としないところから来ています。

II 御父、私たちを造り、私たちに命を与えられた神の大きな愛

「こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとへ向かった。ところがまだ家まで遠かったのに、父親は彼を見つけて、かわいそうに思い、駆け寄って彼の首を抱き、口づけした。息子

は父に言った。『お父さん。私は天（神）に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。もう、息子と呼ばれる資格はありません。』ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い衣（適用：罪のないイエス様という義の衣）を持って来て、この子に着せなさい。手に指輪をはめ、足に履き物をはかせなさい。そして肥えた子牛を引いて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなったのに見つかったのだから。』こうして彼らは祝宴を始めた』：20-24。※証し。親の愛、涙、子どもの時には分からず、今になって理解し泣く自分。「親の心、子知らず」＝「神の心、人間は知らず」。

1. 父は、ずっと家でその帰りをひたすら待っていました。家の外に出ては、日々、姿が見えないか待っていたことでしょう。※証し。それは天の父なる神と同じです。天の父なる神は、神のもとから離れ、失われた私たちを愛し捜し出すために、御子イエス・キリストと御聖霊とをこの世に遣わされたのです。

2. 主は、このたとえによって、罪人（神を神とせず自分を神とし、憎しみ、人を傷つける、恨み、嘘、偽り、悪口、不正、不品行の悪等を持ったまま歩む者）の私たちが帰って行く唯一の居場所としてのご自身を示しておられます。この世に無意味に生まれてきた人はいません。すべての人に神が命を与え、神の御計画、御支配の中で、母の胎から生まれてきたのです。そこには神の愛と御計画があります。自分なんか必要のない人間だと決めつけてはいけません。神は、あなたを愛し、あなたを愛の対象とし、あなたが神に立ち返るのを待っておられます。父なる神は、ご自分のもとに帰って来る私たちを、このような大きな喜びを持って迎えてくださるのです。私たち人間は、自分勝手に神のもとを離れたために、この弟息子が経験したようなみじめな状態（真の愛、平安のない状態、真の心の満たしのない状態。※ある人の言葉。心の空洞。）に自分を置いています。それはなんと愚かな事でしょう。かつての私も！

3. 弟息子は、「我に返り」立ち返って父のところへ帰り、思いがけない歓迎を受けました。以前父のもとを離れた時に彼が抱いていた父親像と、帰って来た自分を抱きしめてくれていた父親像が違って見えた事でしょう。自分の父親とはこのように広く深い愛の人だったのかと。自分がこんな愛の父を捨てて出て行ったことがどんなに大きな罪であったか、またどんなに父を悲しませたかを、彼は改めて深く感じた事でしょう。もう決して父のもとを離れない。これからは、いやいやながらでなく、強制された信仰でもなく、自らの意志で進んで愛の父に仕えていきたい。こうして、父と子の本当の交わりが回復したのです。神を知るとは、神の愛と素晴らしさを知って神を愛し始めると共に、自分の本当のあるべき姿を取り戻すことでもあります。カルバンが言っているように「神認識があって初めて自己認識が与えられる」のです。「神（父なる神）は、実に、そのひとり子（御子イエス様）をお与えになった（クリスマス、私たちの罪のための十字架の死）ほどに世（神から離れた私たち人間）を愛された。それは御子（イエス様）を信じる者が、一人として滅びる（地獄に行く）ことなく、永遠のいのち（神に立ち返り、永遠に神から愛されるいのち）を持つためである」ヨハネ3：16

クリスチャンの方々に、最近、心が神から離れ気味の方がおられたら、今日から、もう一度、神に近づき、神の愛の腕に抱いていただきましょう。まだイエス様を信じておられない方で、本日の説教を通して、神があなたを愛しておられると気づかれたら、愛の神をもっと知るために教会に通い続けて下さい。神はあなたの存在を喜び愛の心であなたを迎えて下さいます。

応答の賛美、聖歌394

「罪、多きところ、恵みも勝る 主は、さ迷える 我があと訪ね 『帰れ我が子よ 帰れ我が子』と

愛の御手もて 招きたまえり」